TANAKA HIROFUMI
PRESENTS

RAKUGO
THE
FUTURE

JAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

第５回:落語とSF-タイムマシンはすてき

文:田中啓文

この「落語とＳＦ」も５回目を迎え、いよいよ華僑。やはり中国人のバイタリティというのはたいしたものだ、などといいつつ、今回はタイムマシンの話である。

試験で、配られた問題用紙を一目見た瞬間、山がはずれた・・・というのが明白になった時、ああ、ここにタイムマシンがあったらなあ、と切実に思ったことは誰でも一度ぐらいはあるのではないか。

何、ない？　幼稚園小学校中学校高等学校と常にクラスで一番の成績？　志望校は東大で、将来は大蔵省から政界入りして政治腐敗をただしたい？　うーん・・・たしかに君にはタイムマシンは不必要のようだ。しかし、君のようなアニメやゲームに縁遠そうな人間がどうしてガイナックスのホームページなんぞに迷いこんでいるのだ。え、統括本部長の日記のページのファン？　ますます、わけわからん。

閑話休題。タイムマシンというのは、もともとＨ・Ｇ・ウエルズという人物が発明したのだが、彼は特許をとっておかなかったらしく、その後、ドラえもんやタイムボカンをはじめ、山のような模倣者を生んだ。

ところで、タイムマシンが日本語のある言葉の語源であるという説を知ってますか。

あるイギリス人がタイムマシンに乗って古代の日本にやってきた。古墳時代の頃だったと思われる。当時の日本人は、何もなかった場所に突然ぼんやりと亡霊のように出現したタイムマシンを見て驚愕し、てっきり先祖の霊魂だと思った。
彼らはタイムマシンを指差し、「これはいったい何だ！」と叫んだ。イギリス人は乗り物の名前をきかれていると思い、「タイムマシン」と答えた。

こうして、日本では霊魂のことを「タマシイ」と呼ぶようになったのである。

皆さん、どうせいつものでたらめだと思っておられるかもしれないが、これは言語学者や古代史研究家の間ではほぼ常識になっていることなのである。ここだけの話だが、文献や発掘物による裏付けもある。ただ、タイムマシンの実在がまだ実証されていないため、残念ながら異端の説として正式には発表されていない。いわば言語学の禁忌に当たる部分なのである。

嘘だと思ったら、知り合いの言語学者か古代史学者に、このことを話してみたまえ。おそらく、一瞬、きょとんとしたかと思うと、わざとらしく「ふっ、馬鹿馬鹿しい・・・」と言って、あなたから目をそらすはずである。そして、急いで「そんなくだらないこと、よそで言わないほうがいいよ」とつけくわえるだろう。その稚拙な演技自体が、彼がその説を知っていることの証明である。そして、よそでしゃべったらあなたの命が危ないということまで教えてくれているのである。

ついでに言うと、瀬戸内海名物の「鯛めし」も、タイムマシンが語源らしいのだが、こちらも言語学の禁忌となっていることをつけくわえておこう。

言語学は私の得意分野なので（自慢ではないが、言語学の博士号を２２９個も持っているのである）、つい、深入りしてしまった。素養のない皆さんには少々むずかしかったかもしれない。もともと肩肘の張らないエッセイなので、

RAKUGO THE FUTURE

第５回:落語とSF-タイムマシンはすてき

文:田中啓文

あまりに学究的な話題は考えものだ。今後、気をつけよう。

閑話休題。昔、「タイムトンネル」というアメリカのテレビ映画があり、なかなかおもしろかったのだが、どうしても解せないことが一つあった。主人公たちはタイムトンネルをくぐって恐竜時代とか古代ローマとか未来都市とかいろいろな世界の過去や未来に旅行するのだが（なぜか場所も移動してしまう）、どういうわけかその世界に着いた瞬間から、そのあたりにいる連中とたちどころに会話ができてしまうのだ。やはり、世界の公用語は英語だと信じている国の番組はちがう。それとも、主人公は異常に語学に堪能で、世界各国の言語を全て理解できるという設定があったのだろうか。

閑話休題。三次元の我々が時間の中を自由に動くというのはそもそもかなりの無理があって、そこに矛盾が生ずる。これをタイムパラドックスというのは皆さんご承知のとおりである。

有名なものに「親殺しのパラドックス」というのがある。過去へさかのぼって、自分が生まれる前の時代に行き、自分の親を殺すとどうなるか・・・というもので、自分は生まれないのだから、親を殺せるはずもない、という矛盾である。

こらこらこら。

なるほど、実験してみよう、といって、すぐに金属バットを持って親の寝室に行こうとした君、ちょっと待ちたまえ。殺すのは、過去へさかのぼってからだ。何？

善は急げ？

とにかくここに私がひそかに開発した簡易タイムマシンがある。これに乗っていきなさい。

そして、少年はタイムマシンに乗り込み、姿を消した。

うーん・・・どうなったんだろう、気になる。親殺しのパラドックスがついに解明される日が来たのだ。もしかしたら、親を殺した瞬間に彼自身も消滅して、二度とここには帰ってこないかもしれない。

あ、帰ってきた。どうした、頭はたんこぶだらけ、鼻血も出てるじゃないか。何、親が予想外に強く、返りうちにあった？

こうして親殺しのパラドックスは謎のまま残ったのだった。

閑話休題。もし本当にここにタイムマシンがあったら、あなたはいつの時代のどこに行きたいですか。

古代エジプトに行ってピラミッド建設の様子を見る？　地球誕生の現場に立ち合う？　戦国時代に行って織田信長に会う？　いやいやいや・・・。

神吉拓郎という作家の「たべもの芳名録」というエッセイに、もし、タイムマシンがあったら、旅行代理店によって、卑弥呼の顔を見ようとか紫式部に源氏物語の講義を聞こうといったツアーが組まれるだろうが、私はせいぜい数十年をさかのぼって、関東大震災前の東京で天ぷらを食ってみたい、という文章があった。少し、引用させていただこう。

出来れば浴衣がけで、震災前の東京の、まだ江戸の名残りをかすかにとどめた町並みを、人混みに紛れて、こころゆくまで歩き、疲れれば、当時の食いもの談義に名をあげられた天ぷら屋の暖簾などを押してみたいものだ。そして、揚げ立ての天ぷらに舌鼓を打ちな

RAKUGO THE FUTURE

第５回:落語とSF-タイムマシンはすてき

文:田中啓文

がら、隣の客の大正言葉に耳を傾けていたら、これは、単なる旅情以上の、胸せまるものがあるに違いない。

そう。

何千年をさかのぼるのも、数時間を逆行するのも、同じく時間旅行なのだ。まるで行ったことのない太古の世界をお上りさん的な興味で見てみるのもいいが、自分のノストラダムス・・・いや、ノスタルジーを満足させるための、ちょっとした時間旅行というのはなかなか悪くない。人間誰しも、どんなに前だけ見て歩いているような人でも、たまには過去をふりかえって懐かしみたいというノストラダムス・・・いや、ノスタルジックな気持ちになる時があるものである。

小学校５年の時に戻って、親に捨てられた怪獣図鑑と怪獣のブロマイドを取り戻したい。

今はつぶれてしまったが、高校の時、クラブのあと毎日通っていたお好み焼き屋へ行って、思う存分豚玉の大と焼きそばを貪り食いたい。

２年前、ちょっとした言葉の行き違いで喧嘩して別れてしまい、今は人妻になっている彼女と、喧嘩する前に戻って、もう一度やり直したい。

そういった願望を満足させるための時間小旅行がしたいという気持ちは誰にでもあるのではないか。

デューク・エリントンの曲に「昔はよかったね」というのがあるが、バブルが崩壊して不況のどん底の今、みんな「昔はよかったね」と思っているかもしれない。

ジャック・フィニイという作家の作品には、そんな過去への郷愁を扱ったものが多いが、若いはずの我々でも、ほんの２０年ほど前のことを「昔はよかった」とか言いだしがちである。「昔のテレビ番組には遊び心があった」「昔のお菓子は楽しかった」「昔のコカコーラはもっとうまかった」「昔の特撮は味があった」「昔の車のほうが乗りやすかった」「昔のまんざいのほうが笑えた」「昔の野菜は野菜本来の味がした」「昔の教師には人間味があった」・・・。ところが、その２０年前にはすでに「昔はよかった」と言っているやつが存在していたはずである。我々は今、昭和はよかった、などと言いがちだが、昭和の人々は大正を懐かしみ、大正の人々は明治を想い、明治維新を経験した人々は、「江戸の頃はよかった」などと言っていただろうし、江戸時代の人々は「戦国時代に戻りたい」、戦国時代の人々は「室町の初期はよかった」などと言っていたにちがいない。こうなると、「恐竜がのし歩いていた頃が、やっぱり一番だったなあ」とか「俺が昔三葉虫だった頃、おふくろは・・・」とか言い出すやつが出てきかねない。

そんなことを言っているおまえは、もし、タイムマシンがあったらいつの時代のどこに行きたいのか、と問われれば、私は即座に、１９６４年前後のニューヨークと答えるだろう。崩壊寸前だったジョン・コルトレーン・カルテットをこの目で見、この耳で聞くことができたら・・・。同じような願望を持っている人は多いだろう。ビートルズを生で見たいとか、五代目菊五郎の舞台が観たいとか、初代春団治の高座を体験したいとか・・・。

おおっ、ついに落語の話題が出

RAKUGO THE FUTURE

第５回:落語とSF-タイムマシンはすてき

文:田中啓文

てきましたね。今回はどうなることかと思っていたのです。だって、落語とタイムマシンと何の関係が・・・。

　などと心配していた人がいるかもしれないが、それは杞憂というものである。落語とタイムマシンは大いに関係があるのだ。

　つまり、落語そのものがタイムマシンなのである。

　考えてみてほしい。今の世の中。海も川も汚染され、空気はスモッグや排気ガスで汚れ、水もそのままでは汚くて飲めず、野菜も肉も農薬や化学物質にまみれ、魚は廃液で骨がゆがんでいる。街はけたたましい騒音に満ち、夜空はネオンの明りで星も見えない。世界中には、地球を何十回だか破壊するだけの核兵器がごろごろしており、そのうちのいくつかは今この瞬間にも我々の頭の上で爆発しないとも限らない。

　そんな「やばい」状況の中で、我々は生きている。

　落語の舞台となっている世界は、江戸時代から明治にかけてが多いが、その頃の日本では、川の水は手ですくえばそのまま飲めたし、野菜は無農薬、卵もにわとりも清浄だし、釣った魚は何の心配もなく食べられた。夜空には星が降るようだし、夏の夜の水辺には蛍が飛び、空気は澄みわたり、静かで、人家の近くで狐の鳴く声が聞こえた。それに、その頃の地球上には、核兵器などというものは存在もしていなかったし、原発もなかった。

　あなたが落語を聞く時、落語の世界に入る時、あなたは自分が今住んでいる「やばい」世界のことをひととき忘れ、たいした心配事もない、のんびりした気分に満ちた、「あの頃」にタイムスリップしているのです。

　それが、話は毎回同じだし、オチもよく知っているのに、何度でも落語を聞きたくなる秘密なのです。

　落語はタイムマシンだ！